

## コミュニケーション能力を育む指導方法の工夫

茂原市立本納小学校

### 1 はじめに

本校は全校児童162名の小規模校であり、今年度で創立120周年を迎えた歴史と伝統のある学校である。

平成28年度に授業改善の取組、平成29・30年度の2年間、県総合教育センターより「これからの時代に求められる資質・能力を育成するためのカリキュラム・マネジメントに関する研究」の調査研究事業に係る研究協力校として、授業研究と職員研修に取り組んできた。ここでは、本校の研究の概要について紹介する。

### 2 研究の概要

#### (1)研究主題設定の理由

本校では、「本気（勉強・運動・掃除）、野に咲く花（強さ・けなげさ）、大きな夢（目標・希望・努力）、感謝（思いやり・あいさつ）」を学校教育目標とし、めざす児童像に①進んで学び表現できる子、②認め合い助け合う子、③活力ある元気な子の育成を掲げている。そして、学校経営の重点の一つに、「自ら学び、思考し、表現する力を育成する」を掲げ、学校として育成を目指す資質・能力を「コミュニケーション能力」とした。

本校の児童の多くは、明るく活動的である。しかし、授業へ取り組む様子は、自ら課題を見つけて主体的に解決しようとする力や、自分の考えをまとめて話したり、友達の考えに耳を傾け、最後までじっくり聞いたりする力は十分だとは言えない。そこで、日常の学校生活の中で、友達と様々な形で関わる場面を設定することで語彙を増やし、各教科の学習の中で、自分の思いや

考えを伝えたいような学習問題（学習課題）の設定をしたり、子供たちが関わり合いながらお互いの思いや考えを伝え、認め合ったりすることができるような手立てを工夫することで、児童のコミュニケーション能力を高めていきたいと考える。

#### (2)研究目標

「児童のコミュニケーション能力を育むための効果的な指導について、実践を通して明らかにする。」

#### (3)コミュニケーション能力を発揮している児童の姿

「コミュニケーション能力を発揮している児童の姿」を資質・能力の三つの柱で整理し、研究を通じた児童の変容を検証するため、児童に実施する「授業についてのアンケート」や、検証授業で参観者が記入する「校内授業研職員アンケート」の項目としても活用した。

	知識及び技能 (話す・聞く)	思考力、判断力、表現力等 (考える・伝える)	学びに向かう力、人間性等 (認める) ※抜粋
低学年	○相手の方を見て、うなずきながら話を聞くことができる。 ○相手に応じた言葉遣いで話すことができる。	○自分とは違う考えがあることに気付くことができる。 ○自分の考えを伝えようとする。	○友達の発言のよいところをほめることができる。
中学年	○話の中心に気をつけて、最後まで聞くことができる。 ○丁寧な言葉を用いて、適切な言葉遣いで話すことができる。	○相手の考えと自分の考えを比較することができる。 ○自分の考えを伝えることができる。 (相手が分かること=伝える)	○自分と違う考えを受け入れることができる。
高学年	○話し相手の意図を考えながら、話の中心に注意して聞くことができる。 ○目的や意図が明確に伝わるように、話の構成を工夫しながら話すことができる。	○相手の考えと自分の考えを比較し、共通点や差異に気付くことができる。 ○相手が分かるように自分の考えを伝えることができる。	○友達の考えを受け入れ集団としての考えを発展させることができる。

#### コミュニケーション能力を発揮している児童の姿

#### (4)研究仮説

問いや手立ての工夫をすれば、お互いの思いや考えを伝え、認め合うことができ、コミュニケーション能力を育むことができるであろう。

### 3 研究の実践

#### (1) 5 学年社会科「情報化した社会とわたしたちの生活」の検証授業

児童のコミュニケーション能力の向上を図るため、以下の四つの手立てを実践した。

##### ① 実態調査を用いたメディアランキングによる導入

導入場面では、「5年〇組メディアランキング」を提示し、ランキングの予想をさせた。ランキングの予想をすることで、身近なものから「情報」についての関心を高めることができた。

##### ② 多様な意見を引き出す「反論発問」

メディアランキングから、メディアの必要性について考える場面では、あえて、「テレビがあれば他のメディアは必要ないのでは？」と発問することで、「いや、他のメディアも必要だ。」という児童の反論を引き出させた。これにより、「様々なメディアの特徴について考える」という学習問題に必然性をもたせた。

##### ③ 個人での付箋記入と3人組での分類

展開場面では、意見の交流が図れるよう3人組のグループを編成した。まず、担当するメディアの長所



付箋記入と意見分類

を青い付箋、短所を赤い付箋に記入させる。次に、個別に考えた意見をグループ内で発表・分類しながら、担当するメディアの特徴を整理した。付箋を活用することで、普段はなかなか発言できない児童も自分の考えを伝えるなど、活発な意見の交流が見られた。

##### ④ メディアの特徴を比較するマトリクス

グループごとの考えを、黒板に掲示した拡大マトリクスに貼りつけ、グループの代表者に意見を発表させ、補足などを書き込

んでいった。さらに、「災害時や天気、物の値段を知りたい時は、どのメディアを使うとよいだろうか。」という

発問を投げかけ、マトリクスに示された長所や短所を参考にしながら最適解を導



マトリクスを参考に深める

き出させた。その中で、自分たちが日常生活でメディアを必要に応じて使い分けられていることに気付くことができた。

このように身近なものから「情報」に対する関心を高めさせ、発問を工夫することによって、自分の思いや考えを伝えたり、お互いの思いを交流したりして、コミュニケーション能力の育成を図った。

#### (2) PDCAサイクル確立のための参加体験型校内研修

本校では、検証授業後の協議会や全体研修会において、参加体験型研修の手法やツールを多く取り入れ、思考の可視化と意見の共有化を図ることにより、全教職員参加のカリキュラム・マネジメントの実現を目指している。

検証授業の授業構想にあたっては、「子供が能動的になる問いの工夫」をテーマに、研修全体



拡大指導案による分析研修

会を実施した。

研修では、県総合教育センター発刊の「授業づくりガイドブック」を基に、児童が自ら「問い」を生み出すための、教員の働きかけについて学んだ。さらに、各検証授業後の協議会では、拡大指導案を用い、授業の成果と課題及び研究仮説との関連を検証・協議している。